

●宣教師、中国官憲、そして客家と称する人々が遺した史料から、「客家」認識の初源を詳細に検討。社会・経済の視点から、客家のルーツを初めて捉え得た注目の論考

近代客家社会の形成

——「他称」と「自称」のはざままで

飯島典子 著

以上の先行研究と客家の定義を踏まえて本書で提起するのは、瀬川昌久が既に指摘しているように客家という明確なまとまりをもった実体が存在することが、全く疑念の余地のない大前提としてなされてきた従来の考え方に對する更なる検討である。

移住による環境の変化によって「我々」意識を形成するのは社会集団の発生に屢々見られる現象であり、嘉應州のような純客家語圏から非客家語圏への移住も多分にこの例に漏れないが、客家の動向は屢々「本地人の差別に對抗する」一枚岩の集団の如く描かれがちであった。客家を集団として団結せしめている要因として、本地人との言語風俗の相違、土地や水利をめぐる対抗意識が挙げられて久しく、それもまた事実であろうがこういった図式だけを差別や衝突の原因とするのは些か短絡すぎるのではないか。

例えば人口の殆どが客家話者であるような嘉應州と、土客の対立が鮮鋭だった西江デルタ地域との相違を考えると、両者の自己意識も同じとは思われない。客家を一つの社会集団たらしめている要因は広東の中だけに限っても、地域によって多少なりとも多様性があり、前述の彭阿木が述べたような、客家語圏の中に存在する「甚だしい差異」に関しては、現在でも充分スポットが当たっているとは言い難く「純客家語圏」と「非純客家語圏」を比較検討した例は管見の限り極めて少ない。

こうした四つの視点から客家語圏を地域別にその社会・経済構造を明らかにすることで、彼等が何を媒介に団結意識を醸成していったかを検討し、この節の冒頭に挙げたように果たして客家という明確なまとまりをもった実体が存在するのか、するとしたらいつ頃からどこで、どのように存在するようになったのか、という疑問に、先行研究を踏まえつつ、現在閲覧し得た史料の中で筆者なりの答えを出したいのである。（序論より）

●目次

序論

第一章 宣教師文書に見る客家

宣教師と客家の接触にあった背景／ギユツラフと「客」の邂逅／アメリカン・ボード（美国公理会）の初期客家認識／Ergas という名称の登場

第二章 西江デルタの叛乱と動乱にみる客家

西江に於ける土客の相克—その発端／咸豊以降の土客衝突激化／天地会と広東客家／西江北岸の客土緩衝地帯／赤溪廳史再考／アメリカン・ボード宣教師の見た広州客家

第三章 広東東北部の客家語圏—その社会・経済

東北部の概略と先行研究／東北部の経済と社会／清代の銀流通と広東／東北部の「鉞賊」／嘉應州の石炭採掘業

第四章 「客人」の自己像とその歴史

「客」意識の濫觴／自発的な組織設立の動きとその背景—嘉属会館と崇正總會／梅県の教科書にみる自己像／葉亜来再考／ペラとベナンの「嘉應州人」と嘉應州会館

結論

索引

体裁

・A5判・並製・カバー
・三〇〇頁

定価

・五二五〇円
（本体五〇〇〇円）

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一—四一九
電話〇三（三八二八）九二四九
http://www.fukyo.co.jp

注文書	
流通センター取扱品	
発売	風響社 TEL: 03-3828-9249
税込み	五二五〇円
部	

飯島典子 著

近代客家社会の形成

「他称」と「自称」のはざままで

ISBN978-4-89489-114-2 C3039 ¥5000E

〔お客様控え〕

ご氏名
ご住所

お電話

月 日